

## 第84回 記者懇談会実施概要

1 日 時 2012年7月13日(金) 15:00~17:00

2 場 所 関西大学100周年記念会館 第2会議室

### 3 内 容

(1) 研究発表・質疑応答(15:00~16:00)

・村田麻里子 社会学部准教授

発表テーマ「なぜミュージアムでマンガを扱うのか  
メディア研究の視点から考える」

・冬木正彦 環境都市工学部教授

発表テーマ「国際競争力に資する専門英語教育システムの開発」

(2) 学内状況説明・情報交換(16:00~17:00)

学長選挙結果について

資料1

社会学部マス・コミュニケーション学専攻名称変更について

資料2

本学学生のロンドン五輪大会出場決定について

資料3

平成20年度採択私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

(総合情報学研究センター)研究成果報告について

資料4

岩手県大槌町連携協力協定調印式の挙行について

資料5

「学校施設の防災力強化プロジェクト」の公募における企画提案の

審査結果について

資料6

平成24年度春学期卒業式および大学院学位記授与式、秋学期入学式の

挙行について

資料7

平成24年度地方教育懇談会開催について

資料8

関大生の活躍について

資料9

第5回関西大学「氷の甲子園」ジュニアフィギュアスケート演技会及び

関西大学トップスケーターエキシビジョンの開催について

資料10

本学教員による出版物について

資料11

夏休み小・中・高校生向けプログラムの実施について

資料12

### 4 大学側出席者

楠見晴重学長、黒田勇副学長、本西泰三学長補佐、

村田麻里子社会学部准教授、冬木正彦環境都市工学部教授、

堀雅洋総合情報学部教授、中川雄弘広報課長、藪田和広学長課長 他

### 5 参考資料

(1) 関西大学通信 第415号、第416号

(2) 関西大学ニューズレター「Reed」No.29

(3) 関西大学 2013大学案内・進学ガイドセット

(4) 行事予定表(7月~9月)

以上

# なぜミュージアムでマンガを扱うのか メディア研究の視点から考える

社会学部マス・コミュニケーション学専攻

(2013年度よりメディア専攻)

村田 麻里子

## 【概要】

今回は、マンガミュージアムを訪れる人々の行動調査<sup>1</sup>から得られた知見について報告することで、ミュージアムを訪れる来館者＝オーディエンスに着目し、ミュージアムという空間のメディア性について考えていきたい。

日本は、ミュージアムと呼べる組織が6000館以上存在する、有数のミュージアム大国である。中でも、マンガをはじめとするポピュラー文化を扱うミュージアムが、90年代以降急増している。ミュージアムをメディアとして捉える研究をしている私にとって、この現象は興味深い。というのも、たとえばマンガ、アニメ、音楽、といったポピュラー文化は、通常はマニアやファンの閉じた共同体の中で消費されてきたものあり、それをより公共的な空間であるミュージアムという場が扱うことは、決して自明ではないからである。

たとえばマンガは「本」という形態で日常に溶け込んでいる。しかし、ミュージアムでマンガを展示する時には、むしろ貴重な原画や、制作過程の原稿や、キャラクターの人形などが想定される。それはマンガ本を友人と読み回す時の「マンガ体験」と、どう異なるのか。なぜわざわざマンガをミュージアムでみる必要があるのか。人々はそこで何をしているのだろうか。マンガとは何かという問いもさることながら、来館するオーディエンスに関する謎も多い<sup>2</sup>。

ミュージアムは、収集・展示・保存という作業を通じて、日々様々なメッセージが構成され、編集され、不特定多数に発信されていく空間である。その意味において、ミュージアムは、マスメディアに似た構造を持つといえよう。だからこそ、そこにはオーディエンス(読者・視聴者・来館者)という存在が欠かすことができない。マンガミュージアムのオーディエンスに焦点を当てて、ミュージアムのメディア性について考える。

## 【プロフィール】

1974年、東京生まれ。関西大学社会学部准教授。東京大学大学院学際情報学府博士後期課程満期退学。博士(学際情報学)。京都精華大学人文学部社会メディア学科専任講師を経て、現職。専門はメディア論、ミュージアム研究。主な著書として『メディア・ワークショップ 学ぶ・遊ぶ・表現する』(共著、東京大学出版会、2009年)、『マンガとミュージアムが会うとき』(共著、臨川書店、2009年)、『ポピュラー文化ミュージアム』(共著、ミネルヴァ書房、近刊)など。

<sup>1</sup> 共同研究メンバーは村田麻里子、山中千恵(仁愛大学)、谷川竜一(京都大学)、伊藤遊(京都国際マンガミュージアム)の4名からなる。本成果の一部は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業(平成22年度～26年度)の助成により行われている。

<sup>2</sup> マンガミュージアムに関する研究成果は、岩波ジュニア新書『マンガミュージアム「超」案内(仮)』(共著、2013年秋刊行予定)として上梓する予定。

## 国際競争力に資する専門英語教育システムの開発

環境都市工学部教授 冬木正彦

### 【概要】

「国際競争力に資する専門英語教育システムの開発及び普及啓発」の業績により、平成24年度科学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術賞（理解増進部門）を大阪大学大学院工学研究科教授福井希一氏と共同受賞した。

本業績に関する活動は、私どもがそれぞれの大学において文科省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）の取組み責任者となり、特に英語に弱いとされている理工系学生を対象に、協力して10年近く取り組んできた活動である。

福井教授は大阪大学において、総合科学技術会議が策定したバイオ、ナノ、環境、ITさらにはロボットなどの最先端科学技術での英語によるコミュニケーションを学ぶ専門英語教育（English for Specific Purposes, ESP）デジタル教材を多くの工学部教員の協力のもとに開発した。一方、関西大学では、教材の配布、小テスト・レポート課題の回収、教員のアドバイス、という授業と学習のサイクル形成を支援できるユーザビリティが高く、かつ、教育機関が主体的に運用できるeラーニングシステム「CEAS（シーズ）」を開発し、さらに学習記録の回収や評価を教員が容易にできるCEAS/Sakai連携システムを開発した。

本活動により、ESPデジタル教材とeラーニングシステムの両者が統合され、大学の授業の中で効率的に専門英語教育を行えるシステムが完成した。

今回の発表では、関西大学におけるeラーニングシステムの開発を中心に説明する。その中で、eラーニングシステムが担任者・学生にとって分かりやすくかつ効率的に利用できるのは、「授業支援型ユーザインターフェイス」と名付けたユーザインターフェイスを採用していることによることを示す。

### 【プロフィール】

1947年奈良県生まれ。1969年京都大学理学部物理学科卒業、1974年同大学院博士課程修了。理学博士。学振奨励研究員などを経て、1981年4月関西大学工学部助手。講師、助教授を経て、1995年同教授となり、現在関西大学環境都市工学部教授。生産システム工学、生産マネジメント、情報システムの研究に従事。1996年日本経営工学会学会賞、2009年工学教育賞（日本工学協会）、2012年文部科学大臣表彰科学技術賞を受賞。2004-2006年度関西大学における文科省現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）の取組み責任者を務めた。日本経営工学会、情報処理学会、教育システム情報学会、IFIP-WG5.7、ACM、IIEなどの会員。